

木村

桂

宮殿に住む

森村桂宮殿に住む



講談社

〈同じ著者による講談社の刊行物〉

森村桂パリへ行く
森村桂香港へ行く
森村桂沖縄へ行く
12の結婚
森村桂日本へ行く
いわせてもらえば
森村桂アメリカへ行く
二年目のふたり
お嫁にいくなら
Lサイズでいこう
友だちならば
ダンナさまヒマラヤへ行く
お手伝いさんただいま三人

ビジョとシコメ
お隣りさんお静かに
青春がくる
おいで、初恋
ふたりは二人
結娘志願
チャンスがあれば
違っているかしら
恋するころ(上)
恋するころ(下)
それゆけ結婚
若さでいこう

森村桂宮殿に住む

1971年10月28日 第1刷発行

著 者 森村 桂

発行者 野間省一

発行所 株式会社 講談社

東京都文京区音羽2-12-21

郵便番号 112

電話 東京(03) 945-1111 (大代表)

振替 東京3930

印刷所 東洋印刷株式会社

製本所 加藤製本株式会社

定 価 420円

Printed in Japan © Katsura Morimura 1971

落丁本・乱丁本はお取り替えいたします。

0093-125558-2253 (0) (文1)

目次

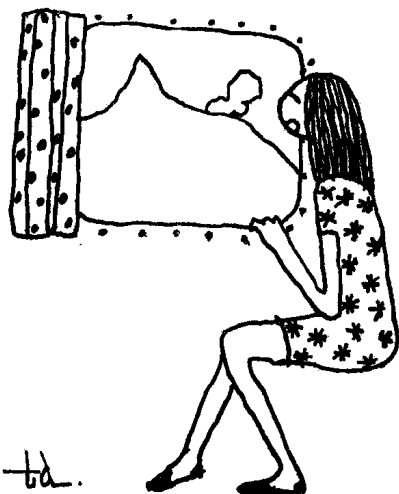
1	お姫さまの夢と天下一の悪妻と	5
2	山に帰ったダンナさま	21
3	シエルパの悲しみ	35
4	これが宮殿?!	49
5	宮殿に住む大使さん	63
6	王侯貴族の庄内さん	79
7	カチ、お姫さまに会う	91
8	宮殿は白く輝いていた	111
9	宮殿には水がない	127

17	あとがき	294
16	さようならロブサン、私のナイト	275
15	山を降りてきた雪男探検隊	259
14	ロブサン、あなたはシエルパだ	245
13	シエルパ娘の誇り	223
12	ロブサンは強盗の一味？	205
11	ロブサンとの友情	183
10	帰ってきた王さま	165
9	ここぞわが宮殿、私の街	145

装幀・挿絵 宮田武彦

森村桂宮殿に住む

1 お姫さまの夢と天下一の悪妻と



「カチ、宮殿に住んでみたありませんか」

この一月四日、雪男探険にヒマラヤに行ったダンナさまから、一ヵ月ぶりで手紙を受けとった時、私は飛び上った。宮殿に住む、それは、まさに私の幼い頃からの夢だった。

今の童話には、どうして、お姫さまが出てこないのだろう。小説や映画は、どうして、お姫さまの生活ばかりを、出さないのだろうか。それだったら、私は、いつでも、かじりつくのに。

そう、幼い頃、私の読んだ本といえば、みんなお姫さまの物語だった。白雪姫がママ母にいいめられ、いろいろつらい思いをして、最後に素敵な王子さまと結ばれる。あるいは貧しい少女シンデレラが、かぼちゃの馬車に乗って、王子さまのところにいく……。みんなみんな、お姫さまの物語だった。ハッピーエンドということは、王子さまと結ばれて、お姫さまになることだった。そして、いつしか、私はそれにあこがれた。私の家は、父が小説が売れなくて貧乏だけど、友達のように、こけしのついた赤いプラスチックのお裁縫箱が買ってもらえないけど、ミサちゃんのようにお金持でカッコいいボーイフレンドがいなくても、でも、いつか、いつか、私のところに、王子さまが現れる。横浜の港に、突然見知らぬ国の船が着いて、お伴の兵隊をいっぱい

連れた、でっばったおなかに金の刺繍や勲章をいっぱいつけた大臣がやって来て、私をバカにしていた友達や近所の人みんなの前で、うやうやしく、私の足許にぬかずき、

「姫さま、お迎えに参りました」

そういう日がきつと来る。だから、どんな貧しい時も、私はつらいとは思わなかった。どんなに淋しく、悲しいことがあっても、ひとりっきりになれば、私は夢の世界に遊べた。そこには、大きな緑の森があつて、湖があつて、噴水があつて、バルコニーのついたまっ白な宮殿があつた。その二階の、部屋が三つも四つも続いたいちばん奥の天蓋付のベッド、そこで、私は侍女たち、どんな羽よりも軽い歩くたびにゆれる、絹のドレスに着がえさせてもらつて、ゆつたりとした螺旋階段を下りて行けば、とてつもなく高い天井に大きなシャンデリアの吊るされた大広間が、その奥の間の白いレースのテーブルかけのかかったテーブルには、今焼きたての七面鳥が、苺のいっぱいのった三段重ねのケーキが、まっ白な服を着たボーイたちが、プリンセス・カチの来るのを待っている。大理石の暖炉にはあかあかと火が燃えて……。

たとえ一年中同じハゲチヨロケのスカートをはき、すりきれたセーターを着、アンミツ一杯食べるのにも、ウインドウの前で、四十分も考えなきゃならなくても、あこがれの男の子から手紙が来て、ワクワクする胸で開けたところ、私の親友のアコに何とか気持ちを伝えてほしいと書いてあったとこで、傷ついたなんて顔みせないで学校に行けた。ぐれたりなんかしないですんだ。

今、私は、幸せである。ダンナさまは会社を辞めて、借金かかえて半年の予定で雪男探険に行っちゃったけど、帰ってきてそのあとどういふ暮しになるか、全く解らないけど、好きな人と結婚し、書きたいことを書いていられる毎日、不満なんかありっこない。

でも、だからといって、私のお姫さまへのあこがれが、消えたなんてことはなかった。やっぱり、やっぱり私は、いつの日かまっ白な宮殿で、長いドレスを着て、お姫さまといわれながら暮す日を、夢みていた。

ああ、その心を、ダンナさまは知っていたのか。テレビの大嫌いな私が、お姫さまが出るという、

「お願い、お願い、ちょっとでいいから切りかえて」

というのを、

「バカヤロ、そんなの観たってしょうがねえよ」

といって、スパイ映画ばかり見ていたダンナさま、でも、ダンナさまは、ほんとは少しばかり気にしていたんだ。

「カトマンズの街には、カチの大好きな宮殿がいっぱいあります。しかも、その宮殿は月七万から十万で借りられるんですよ。召使いは一人につき三千円くらいですから、十人も雇えばいいでしょう。カチ、ぼくたちが雪男探険隊から帰るまで、そこを一つ借りて住んでいませんか。カチのあこがれのお姫さま暮しが出来ますよ。手配は全て、カトマンズのアグナ大佐がしてくれま

す」
月、たったの七万か十万で、そうとも、東京のマンションを借りるぐらいのお金で、まっ白な大きな宮殿が借りられる。お手伝いさんが一人か二人分のお給料で、召使いが十人も雇える。ああ、そんな夢のようなことがあるだろうか。それも、ダンナさまが、大佐に頼んでくれたのだ。私はただ、お姫さまとしてそこへ行けばいいのである。

ヒマラヤの見えるカトマンズの街の宮殿で、ダンナさまが帰るまで、お姫さまのように暮せたら、どんなに楽しいだろう。召使いたちには全部白い服を着せ、プリンセス・カチって呼ばせるんだ。ダンナさまたち雪男探険隊が帰って来たら、美しいプリンセス・カチを見て、どんなに驚くだろう。もし、雪男君が一緒だったら、彼をまず大理石のお風呂に入れて、髪をきれいにとかしてあげて、いっぱいごちそうしてあげよう。プリンセス・カチ得意のバナナ・ケーキを焼かせてもいい。カトマンズは暑いだろうから、しじゅう召使いたちに、柄の長い白孔雀の羽のうちわであおがせよう。したら、雪男君、もう宮殿を出たくないっていうかな。いいんだ、そうすればオフクロさまも招んで、みんなで宮殿で一生暮すんだ。

「お母さん、宮殿が借りられるのよ。お姫さまみたいに暮せるのよ。お母さんも来ない？ うんと贅沢させてあげる」

私は興奮して短い縁側の端から端まで踊り上っては走っていき、すぐに向うの端にぶつかって、までもどってはぶつかって、オフクロさまとお手伝いさんたちに、ダンナがいなくて、ついに気がふれたかと誤解される。

「何しろね、むこうの召使いつて、門開ける人は門開けるだけ、ごはん作る人は作るだけで、他には一切、何もしないんだって。だから、最低十人はいるのよ」

「へえ、門閉める人は別にいるの」

そうか、ってことは、十人じゃ足りないな。二十人ぐらいいるぞ。私は早速ベースキャンプのナムチェバザールあてに、ダンナさまに手紙を書き、カトマンズの街に住むブータンからの亡命者で、ブータンでは二番目に偉かった大佐、とはいえ今はしがたない旅行代理店のオヤジさんのア

グナ大佐に手紙を書いた。さあ、そうと決ったら、出発の用意だ。私は、カトマンズ到着の日を一ヵ月半先の三月二十日と決め、残ってる書き下しや連載の書きだめを必死でし、用意出来るお金は全部用意し、待ってもらえる支払い全部待ってもらい、その上借金までして、ああこれだけあれば、当分優雅に何の心配もなく暮せるのになあと思ひながら、いやいや、長い間の夢が今かなうのだ、帰ってからまた麦飯にじゃがいもとピーマンの煮たのを食べて、借金にフーフーあえいだっていいじゃないか、ダンナさまの帰る予定の五月末までの二ヵ月と十日、夢のような暮らしにとっぷりつかってみようと、友達のだザイナー、ムッシユ・セイジに裾の長いお姫さまドレスを何着も作ってもらって、三月十九日、日本を發った。

朝の六時というのにむーっと暑いニューデリーで、日航機からロイヤルネパールの小さな飛行機に乗りかえた時、私は思わず眉をよせた。ちりひとつなかった今までの飛行機と違って、何ともほこりっぽく汚いのだ。スチュアデスは、紺のサリーの下から、ブクブクのまっ黒なおなかを出し、その上たぬき化粧をし、マニキュアの手で、お手洗いのわきで、ほこりっぽく折りたたみの紙の箱を作っては、そこに、半分乾いたサンドイッチやゆで玉子、バスバスの洗ってないみかんをみんな手づかみでつめてみんなにまわし、やはりあまり清潔とはいえない紅茶茶碗のふちを、ときどき親指の先でこすっては紅茶をついでまわす。やれやれ、私は飛行機というものは、いつも、ものすごく清潔で、きれいでやさしいスチュアデスが、ふだん食べられないようなごちそうを、次から次に運んで来てくれるものだと思つていたから、私は何か変な気がし、まわりつくと二匹のハエを追ひながら、紅茶を飲み、はて、この生ハムの入ったサンドイッチを

食べるべきか食べざるべきか思案する。

雪男は大勢でいくと逃げてしまうので、撮影班と別れて、ひとり、ベースキャンプを降り、今はアンナプルナに行っているというダンナさまからは返事が来ないけど、大佐の方からは、二度も手紙が来て、素晴らしい宮殿が見つかったからいつでもどうぞといってくれた。しかし、やれやれ、私の侍女たちは、こういう女性なんだろうか。ようし、わが宮殿は、みんなにしょっちゅうお風呂をつかわせて、清潔これつとめることにしよう。

砂漠の中を大きく曲りくねったガンジス河を越えて、しばらく行ってから、何げなく、左手の窓を見ていた私は、思わず、アッと声をあげた。白い雪の上の青い空に、ポッカリ浮いているのは、あのそそり立った三角の白い山は、

「フアット、ネーム？」

「アンナプルナ」

アンナプルナ——。ああ、この山がアンナプルナなのか。何ときびしく美しい。あの、白く噴き上げる煙は何だろう。ああ、これが八千メートル、アンナプルナか。ダンナさまが今登っている山か。もしかしたら、雪男が歩いているかも知れないのだ。私は、窓にじっと額をつけ、その白い山肌を凝視して、何か動くものはないかと探した。もう一つ、山がきた。やはり白く険しい山だ、煙りを噴いている。

「マチャプチャレ」

さっきまで、不潔でたまらないと思っていたスチュアデスが、親切な顔で教えてくれる。私は、こんなに高い山、こんなに美しい山を見たことがなかった。

ああ、ダンナさまは、ここに登っているのか。この山々を登る為に、ダンナさまは会社を辞めたのか。結婚前、ダンナさまは会社を辞めてヒマラヤの山々を歩く筈であった。しかし、結婚を決意した時、ダンナさまは、その夢を捨てたのだった。四年と半年の間、テレビ局で、プロ野球のディレクターなどというさっそうとした仕事をしながら、その仕事を、生き生きとしてやっていながら、しかし、にもかかわらず、ヒマラヤという度にダンナさまの目が、ある不思議な、ふだん決して見せない光り方で輝いたのを、私は、今、理解出来るような気がした。仕事も面白く、月給も良かったテレビ会社の社員の職をパツと捨ててまでもヒマラヤに登りたかった気持が、私は理解出来るような気がした。この山というものに、全く興味のない私にさえ、それほどこの二つの山は美しく、きびしかった。何か人をひきつけてはなさぬ神秘なものがひそんでいた。私はその白くそそり立つ、煙りを噴き上げる二つの山々を見ながら泣いた。私がお姫さまにあこがれるように、いや、それ以上に、ダンナさまは山が好きなのだ、山で育ったのだ。

もっと前にこの山を見ていたら、私は、四年間もダンナさまをしぼりつけていられたろうか。だめだ、この山はあまりにも、美しい、あまりにも神秘だ。私だって、男なら、ダンナさまのように体力があれば、夢があれば、この山にかりたてられるだろう。雪男だって、この山になら住む。

私は、いつまでも、その山から、目が離せなかった。ダンナさまを山に帰してよかった。ああ、こんな山を、ダンナさまは歩いているのか、そう思うと私の心までも踊るようだった。

飛行機は雲の中に入って何も見えなくなった。雲が晴れると、もう、白い山は見えず、濃い緑の山々だった。その山をいくつも越え、最後の大きな森のような丘を越えて、飛行機は高度を落

した。ネパールの首都、カトマンズの街は盆地になっていた。

赤土が、緑の原が見えて来た。家がある。土で造った素朴な家だ。どこも乾ききっている。まるで土人部落のような、田舎の家だ。飛行機は原っぱのまん中の飛行場に下りた。

さて、アグナ大佐は迎えに来てくれるだろうか。それとも、まずは予約したホテル シンカールまで、タクシーをひろって行かにやあなるまいかな。お姫さま御到着には、ちよつとふさわしくないけど。私は、ゆっくりと窓から、ゲートに立っている何人かの人たちを目で探したが、どの人もまっ黒で解らない。私は、いくつもの荷物をかかえ、ニューデリーの空港でわずか百円で買った、まるで横綱の綱のようにもっこりと大きい、黄色いレイで少し前かがみになりながら、それでも、お姫さまらしく、優雅に降りた。

一生懸命、写真で見た、長身のアグナ大佐を見つけようとするがいない。と、あずき色の花模様のシャツを着た、シエルバだろうか、髪の長いまっ茶色な男が私を見とめて、手を上げた。

「カチー！」

私はアッと声をあげた。何と、ダンナさまではないか。私は、荷物を放り出して、ゲートの下に向って走りよった。

「どうしたの、一体」

私はどなった。アンナプルナの山を歩いている筈のダンナさま、一体全体、どうしたというのだ。雪男君でも、みつかったのか、それとも、何か事件があったのだろうか。

「それより、お前の方こそ、どうしたんだよ。亭主の仕事、邪魔しに来て」

「何ですって!!」

「俺は、今頃、アンナプルナ歩いてる筈だぞ。おい、悪妻……」

日本語が通じないのを幸いか、よほど腹が立っているのか、ダンナさまはどなりつづける。

「今頃、ばっちり、雪男に出あつてるかも知れないんだぞ。それを、足どめして、俺の飛行機は、もう行っちゃまったじゃねえかよ。一体どうしてくれるんだよ。お前は、天下一の悪妻だよ」
私は、フエーッと、尻もちをついてしまった。ここへ来る為の一ヵ月半の無理と、旅の疲れがいつべんに出て、炎天に坐りこんで、動けなくなってしまった。

「バカヤロー！　いつまでも腰ぬかしてねえで、早く税関に行けよ。お前なんか、離縁だぞ」

いやはやまあ、一体どうなっちゃったんだろう。私は、何とか自分を励まして、さっきより一段と重くなったレイで、もっと前かがみになり、荷物でヨロケながら、税関に向って、ゆらゆらよろよろ歩いていった。だけど、それにしてもまあ、タンナさま、どうしたっていうんだろう。探險に行つてる筈の人が、私を迎えに来てるなんて。それも、私のおかげで、あの、アンナプルナに行けなくなつたなんて、そんなむごい。私には、何が何やら解らなかった。一体、ダンナさま、何を感じていたのだろう。

「いやあ、よく来たね。大変だったろう」

それでも、税関を出ると、ダンナさま、まっ黒な、ちょっと老けた顔で、私をねぎらってくれる。しかし、何とも、私は落着かない。

「さあ、何はともあれ、車に乗ろう。彼は、今度のアンナプルナに行くシエルパのアンギアルプだ。こっちは、大佐のところの運転手エラ君」

「ナマステ」